

---

# M a g i c b o o k s

真っ赤な誓い

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M a g i c b o o k s

### 【Nコード】

N 9 3 8 9 K

### 【作者名】

真つ赤な誓い

### 【あらすじ】

ある日ひよんな事から曾爺ちゃんの倉を掃除する事になった安田拓人。

その倉にある地下室を見つけて自律型魔導書製造N0・1 シロガネを見つけてしまった。

紆余曲折を経て共同生活が始まるがシロガネを付け狙う男の魔の手や、シロガネの秘密が平穏を許さない。

魔法アクションストーリー！

## 拓人と魔導書

吹きすさぶ冷たい風の中、安田拓人（やすだたくと）は屋根の上に居た。

拓人の爺ちゃん　しつかり言うならば曾爺ちゃんの家屋根を直しにはるばる、新幹線でやって来ていた。

周りに民間は無い。

まあ、それは当たり前だ。

ここは、ド田舎だからだ。

周囲二キロメートルには誰も住んで居ない。

ここ日本にまだ土地つてあつたんだなあ、と考えてしまう。

拓人は瓦を外して、放り投げる。怒鳴られた。

時は十二月三十日。

爺ちゃんは瓦が欠けたからと、屋根に登った所、落ちて骨折したらしい。

そこで、爺ちゃんは拓人を呼び出し、屋根の瓦を直す役目を与えたという訳だ。

瓦なんて良いじゃんと言ったのだが、爺ちゃんは新年は、家をピカピカにして迎えるのが僕の、日本人の心意気だろ。と言って聞かなかった。

拓人は怒鳴られないように瓦を慎重に嵌め込んだ。

「次は倉の掃除でも頼もつかない？」

右腕にギブスを嵌め込んでいる拓人の爺ちゃんがニヤリと笑いながら言う。

「ふざけんなよ爺ちゃん。あの倉何年も掃除してねえだろうが！」

爺ちゃんは右腕を身体全体で抱え込むようにしながら苦悶の声を上げながら、

「う。拓人の声が……右腕に響くうゝから倉の掃除を。やってくれるよな？ 右腕骨折しているか弱い爺さんの頼みをむげにするなんて事は……」

拓人は、乱暴に叫んで倉に向かって歩き出す。

「分かった分かった分かりましたよ！」

家の横にちよこんとある小さな倉だ。

時間はかかるまい。

倉の前で立ち止まり、倉に立てかけてある箒とちりとりを見やる。

（用意が良いことで）

箒とちりとりを持って中を開ける。

もわつとした埃が倉中を舞う。

袖で口を押さえながら中へ足を踏み入れる。

訳の分からない水墨画や、刀（偽物） や懐中電灯に葛などなど。

溜め息を一つ吐いて倉を掃除し始めた。それから三時間後。拓人は最初の甘い予想が見事に打ち砕かれた事を感じながら、倉にある全ての物を外に出し終わってすっきりした倉を見渡す。

と、二メートル程の四角形の床が銀色の鉄で囲まれていた。

さながら地下室の入り口のように。

湧き上がる好奇心に素直に従って、入り口を開けてみる事にした。開けやすくなっているようで周りの床に比べてこの入り口は少し高い所に位置していた。

割と簡単に開いて、中を見る。

石段があり、そこから先は良く見えない。

あの倉に懐中電灯があつた事を思い出して急いで取ってくると中に足を踏み入れた。

石段を下っていくと、部屋に出た。

ライトを色々な所に当ててみた所、白い部屋のようにだ。

何も置いてない。

「無機質な部屋だなあ」

言いながら、

その真ん中に、ライトを当てる。

ぽつんと、白い本があった。

「本？」

立ちながら読む為なのか百五十センチ程の高さの書見台に立てかけてあったのだ。

「えっと。本……だよな？」

リアクションに困りながらも本を手にして　本が雷光のような光を放った。

「くあッ!？」

目に雷光のような光を放った所為で本を放り投げてしまった。

「きゃあッ!！」

女の子の可愛い声と、どすんと尻餅をついたような音がした。しかし、今の拓人はそんな音や声は聞いている余裕はなかった。

バタバタゴロゴロと、目を必死に手で押さえながら転げ回っているからである。

「目が、目がアアアアア!!！」

数分後拓人は、目が回復して来たのを感じて、目を開ける。

真っ暗だった。

ダラリ、と嫌な汗と半端でない程の焦りが這い上がってきた。

目が、目が見えない!？」

口を意味もなくパクパクさせてから、

.....。

暗闇だった事をすっかり忘れていた。

「は、ははは。良かった。本当に良かったあ」

ほっと一息吐いてから無意識の内に放り投げてしまった懐中電灯を手探りで探し始める。

手を闇の中で無造作に振るい　何か柔らかい物が当たった直後。

「ひゃっ!！」

女の子の焦ったような声が聞こえた。

もう一度、柔らかい物が当たった場所に手を移動させる。  
むぎゅ、柔らかく温かい。

拓人の表情は興奮でも喜色でもなく、色々な感情が顔に出た結果、盛大に引きつっていた。

「え？ お前……誰だ!？」

柔らかく温かい物を触っている手を掴まれつねられた。

鈍い痛みを発したが、そんな小さな痛みは今の拓人には効かない。思考は迷走に迷走を重ねて、青白くなった顔で力の限り叫んだ。

「ゆ、幽霊ツ!？」

「違うよ。私は魔導書シロガネ。登録魔法は白鉄（しろがね）

と白銀（しろがね）。うん。君は私の封印を解いちゃったし私の所有者に認定決定だね」

ま、魔導書？

色々

な紆余曲折を経て少女を外に連れて来て気づいたのは少女が裸だったという事と少女は美少女だと言う事だ。

シロガネの名の通り、白銀色の綺麗な髪を腰まで伸ばしており、スタイルも良い。

髪とは対照的に目は大きく綺麗な黒色だ。

そんな美少女 シロガネは真っ赤な顔をしながら大きな胸と下半身を隠しながら半目でこちらを睨んでくる。

「すぐにお召し物を持ってきます!」

拓人の代えの長袖と拓人の上着を急いで爺ちゃんの家の縁側から持ってくる、シロガネに渡す。

シロガネは素早く、荒々しく拓人から長袖を奪い取るとそのまま流れるように服を 着れなかった。

腕を出す所から頭を出そうと頑張っているシロガネの手助けをしてあげる。

シロガネは赤い頬のまま、ぼつりと言う。

「ありがとう」

何だか照れくさくなって、別の話題 聞かなきゃならない話をする。

「え〜と。自分は魔導書だ。みたいな事言っただけどあれは何？」

「？」

小首を傾げてシロガネ。

「だから、シロガネ。お前は魔導書なのか？」

合点がいったのか「ああ、そういう事か」と言うように頷くと、

「そうだよ。私の名前はシロガネ。自律型魔導書製造番号一番のシロガネ」

（マジで魔導書なのか？ 意味が分からん。でも、あの地下室には確かにシロガネは居なかったのに急に現れたしな。しかも本が光ったし……。つーか自律型魔導書って何？ ロボットみたいなもんって事か？）

「ん〜……」

正直、まだ信じられない。

だけど、急に現れたのは事実な訳で。

拓人は額に皺を寄せて、シロガネの下半身を見て、さっと視線を外す。

何で上半身は完全防備施してんのに下半身は完全無防備なんだよ！ とか心の中で突っ込み額に皺を寄せてクールにドキドキしている心を装っている と本人は思っているが鏡でみると実はエライ事になっている拓人だった。

「あ、魔法を使えるようになってるよ」

何かさらっと大事な事を言われた気がした。

「え、何だって？」

「いやだから魔法を使えるようになってるって。ほら私は魔導書だから」

「は？ 魔導書関係あんの？」

「魔法を導く書で魔導書。私の所有者は魔法を使えるようになるの。まあ、魔導書に記されてる登録魔法だけだけ」

「所有者？ 登録魔法？」

「うん。登録魔法って言うのは魔導書に書かれている魔法の事。それに本って事は所有者が居るのは当然でしょ？」

「そうだな……ってちげえ！ そうじゃなくて何で俺がお前の所有者なんだよ！」

「私が認めたから？」

「何で疑問形なんだよ！ まあ、いいや別に」

ぶんぶん、と腕を振って、

「魔法ってどうやって使うんだ？」

「あれ？ 私を見なかったの？」

私、というのは魔導書の事だろう。

「ああ、中身は見てねえぞ」

「あ、ならまだ無理」

「オ〜イ！ 拓人才オオ！ 帰りの新幹線が出ちまうぞお！」

と、爺ちゃんの大声と走ってくる音にびびり、シロガネを草垣の中に突っ込む。

シロガネは「きゃあつ」と言っただつきり声を出さなかった。

突っ込んだ時に妙に固い感触があったのだが、まあ、気にしない。それよりも大事な事がある。

大丈夫だ。

シロガネは俺の前に居たから俺の背中に隠れて見えなかった筈だ。冷や汗を流しながら、爺ちゃんに答える。

「わわ分かったよ。爺ちゃん。倉の掃除は終わったから……ははは

(愛想笑い)

「誰かと喋ってなかったか？」

「つとお！ 俺の独り言を聞かれてたか。いやあ、独り言しちゃう癖があつてさあ。にしても新幹線が出ちまうのかそりゃ大変だ！

そして急いで爺ちゃんの肩を揉みたい気分だ！」

何の脈絡もないガタガタトークをしながら、爺ちゃんも縁側に急いで座らせて肩を揉む。



爺ちゃんは目を白黒させながらも相好を崩す。なんとなく拓人は嬉しくなった。

「そういえば、地下室なんてあったか？」

少し、拓人の力が強まった。

「ああ、あつたけどアレ何なんだ？」

「最低最悪の魔導書が眠ってるとか」

拓人の手が止まった。

「最低最悪の……何？」

「魔導書。まあ、昔話みたいなもんだ。儂が子供の頃に倉の物を壊しちまった時に聞かされたよ。「魔導書に殺されるぞ」ってな」

一瞬、シロガネを思い浮かべてしまい、急いで掻き消した。

昔話みたいなもんだ。そう言ってたじゃないか。それにアイツが悪人だとはどうしても思えない。

爺ちゃんはちよつと寂しそうな顔をする。

だが、それも一瞬。

次の瞬間には笑いながら、

「新幹線、出ちまうぞ」

なんて言った。

なんとなく拓人は二、三回肩を揉んでから後ろ髪引かれる思いで別れを告げた。

「バイバイ爺ちゃん」

草垣で本の姿に戻っていたシロガネを持ってプラットフォームへと急いで走って行った。

そう、倉の中身を全て出しっ放しにしたまま爺ちゃんの家を後にしたのだった。

爺ちゃんが怒り狂ったのは言うまでもない。

臯月荘の二号室。

それが拓人の家だった。

因みに一人暮らしである。

「人生経験を豊富にしなくちゃね（な）」

と両親に言われて一人暮らししている。

そのおかげで料理スキルアップ。ご近所付き合いも豊富になったりしている。

ドアノブを捻り本をソファーに放り投げた。

「きゃあっ！いきなり投げないでよ」

拓人はその声に目を丸くして、

「今まであんな乱暴に扱っても何にも感じてなかったじゃねえか」

「当たり前だよ。喋る本なんてみんなに知られたらどうなるか……私だって拓人にむ、あのあれを触られなかったら、存在に気付かれなかったら言わないつもりだったし……」

声のトーンが何時もより数段低かった。

それだけで胸が痛くなった。

シロガネは自分の存在にコンプレックスを抱いているのだろう。

否、コンプレックス以上のどうにもならない種族の壁。

ベルリンの壁よりも厚くて強固な触れ合う事さえ許されないような人間と魔導書の壁。

そんな壁がシロガネにはあるのだろう。だからこそ存在を隠そうとしたのだろう。

けれど、

「俺は全然気にしないぞ？ 最初はまあ、すっげえ驚いたけど、臈月荘に来るまでに整理もついたし。それより飯って食う訳？」

「うん！ 食べれる食べれる！」

拓人に心配をかけまいと無理に明るい声を上げるシロガネを助け出したいと拓人は思った。

「そういえば、拓人？ 私を突き飛ばしたよね？ 咄嗟に本に戻ったのにも関わらず！」

あの妙な固い感触は本か。

「ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げたから、苦笑する。

本に頭を下げる人間の像はあまりにもシユールだと思ったからだ。  
「そついえば……服どうしよう？」

……。  
奇妙な沈黙の後。

「トランクスつて履ける？」

本が唐突に裸の美少女に変身してアッパーカットを決めてきた。

結局、拓人はシログガネのスリーサイズと身長を聞き出して服を買ってきた。

「にしても……百五十七センチの八十八、五十五、八十二つて凄い……よな？」

女子のスリーサイズを聞いたのは生まれて初めてなので（バス  
トだけなら聞いた事はあるが）いまいち、凄さが分からないが、  
結構スタイルは良い方だと思う。

すると、横合いから、不機嫌な声が飛んで来た。

「凄いななんてもんじゃないわよ！ あんたどんな従姉居んのよ!？」  
魔導書です。なんて答えられる筈もなく黙って拓人の中学からの

友達 前田南さんを観察する。

黒髪を肩まで伸ばしている何の変哲もない女子である。

いや、胸は同世代の子よりもないか。

スツ、と無音の動作で腕を振りかぶったので慌てて今日のお礼を  
早口に言う。

「今日ありがとうとな！ まさか従姉が何も持たずに来るとは思わな  
かったからさ！ いやあ、店で会えるなんてラッキーだったなあ」  
実際本当に助かった。

女の子の下着と服を物色している時点で周囲からの視線が半端で  
はなかった。

そこに前田が通りかからなければ拓人は社会的に抹殺されていた  
かもしれない。

「まあ、こっちも奢って貰っちゃったしおあいこよ。おあいこ」

「テメエは遠慮つてもんを知らねえだろ？ 何千分パフェ食いやがった。このブラックホールが！」

「な！？ あんただって食べてたでしょ！ それに三杯食べただけじゃない！」

三杯は普通の領域なのですか！？ と叫ぼうとした所で、

「うえ〜。……って拓人オオオ！ 二時間も何やってるんだよお！ もう八時 って誰！？」

ジャージ姿のシロガネが廊下の手すりにしがみついて叫んでいた。ジャージ姿なのは、流石に裸で待つのはなあと思隣人の後藤さんにジャージと下着を貸してもらったのだ。

「がい、がいがい、外国じつ！？ んってえ？ わああああ！ 世界は不公平だああああ！！」

南は拓人の従姉が外国人という事実には焦り、怒り顔のシロガネが手すりを乗り出した所で、胸を見てしまい、世界の不条理を感じてどこかへ走り去ってしまった。

黙祷。

「私を忘れてあの女とデートし

てたんでしょオオオ！」

直訳。私を忘れて自分だけ楽しんで！

そう。決して、好意を持たれている訳ではないのだ。

好意を持たれているのであれば顔にひっかき傷は残らないからだ。顔にひっかき傷を付けた拓人は、

「すみませんでした」

言うと同時にお召し物を渡す。

シロガネは不機嫌な顔を隠そうともしないで、服を受け取り律儀にありがとうと言ってからトイレに籠もって着替え始めた。

赤のジャンパーにジーンズという恰好で出て来た。

「それじゃあ、ジャージ返してくる」

トテトテと、嬉しそうな顔をしながら後藤さん宅へ届けに走って

行った。

「ま、まてっ！俺が返しに行くッ！」

慌てて駆け出しドア枠に足の小指を激突させた。悶絶。ボキッ、と致命的な音を立てたが大丈夫なのだろうか。

シロガネが出て行ってから数十秒後。

シロガネが半分涙目で帰って来た。

「どうしたんだ？」

「あの人が「女の子らしくない！」是非とも着替えなさいって……無理やり……」

やっぱり。

だからこそ、慌てたのだが、まあ何にもなくて良かった。

というか……大きな宝石のような黒の瞳に涙を浮かべ、頬を赤らめているシロガネがちよつと可愛くて見惚れてしまった。

とは言え、拓人には女の子が泣いている顔見て嬉しがる性癖がない。

というか、凄く気持ち悪い。

「あゝ。ごほん。まあ、あれだ。今日はカップめんに決定だな」

言いながら買ってきたカップめんを台所に持って行く。

「カップめんって美味しい？」

「は？カップめん知らねえの？お湯淹れて三分でラーメンが出来ちゃうって言うあのカップめんだぞ？」

「私が居た時代はカップめんなかったからね」

さらりとした年増発言に場の空気が凍りついた。

「え？こんな所でそんなカミングアウトっつうかシロガネお前何歳なんだよ！」

「ええっと、封印されたのが五百年くらい前？だから……あゝ五百歳くらいなのかな？」

ふと、悲しそうな顔をした。

が、それも一瞬。

直ぐに元の笑顔になって、わくわくとしたようにカップめんを見

ていた。

自分でも気づいていないのだろうか？

コタツに座ってテレビを点けて、カップめんを啜る。

不意に違和感が駆け上がった。

何だろう？ この違和感。

くすぶっていた物が急に爆発したような……。

そんな思考もアニメの主人公 劣化によって遮られた。

『オオオオツッ！』

拳から炎を出して敵を薙ぎ倒していく。

『ぐああツッ！ 何だあの化け物はアツッ！？』

横合いを見てみるとじい、とテレビに食いついているシロガネが居た。

微笑ましい光景だ。

カップめんを食べ終わった拓人は、カップをごみ箱に捨てると、明日と明後日の予定を考える。

新年を迎えるに当たって大掃除をするべきか 正月の初詣にシロガネとどこに行くかべきか、雑煮を白味噌から合わせ味噌に変えるか、赤味噌で冒険するか……。

そんな一般的な悩みなど吹き飛ばす事が起こるとはこの時、拓人は夢にも思わなかった。

倉は滅茶苦

茶に壊され、コンクリートが崩れ落ちる音が随時間こえる。

ガラガラ

こんな所業は人間には不可能だ。

そんな中、拓人の爺ちゃんは息が出来ずに喘いでいた。

理由はシロガネとは違い、濁った白銀色の髪を短く切っている筋肉質な身長二メートル程の大男が首を絞めているからである。

「あの地下室にあつた魔導書はどこだ？」

地鳴りが起きそうな低く冷たい声だった。

しかし、それ以上に目が恐ろしかった。

殺人や窃盗などを顔色一つ変えずにやりそうという目ではなく、目的の為ならどんな犠牲をも背負う覚悟のある目だった。

ゾクツと背筋が凍りつく。

だらだらと唾液が口元からだらしなく地上に落ちて行く。

戦時中　こんな目をした者が果たして何人居たか。

そいつらは生きる為に、命令だからと言って人を殺すだけの人形になった奴らより　強い。

何なんだこの男は……！

混乱しかける頭を無理やり働かせる。

何かの破壊音を聞きつけて、飛び出してみたら、この男が破壊された倉の前で立っついていて、首を絞められ、

「言え。魔導書の在処を」

そう言われた。

ぼんやりした頭で魔導書の事を考えてみる。

魔導書関係の話と言えば昔話くらいだ。

あとは……。

「た、ぐと……？」

少し首を絞める力を抜かれてほっとしてから重大な失敗をした事に気付いた。

ガラガラ……。

倉が崩れ落ちる音が止んだ。

「たぐと？　誰だそれは」

「儂の孫の子供だ。肩を揉んでくれてなあ」

世間話をするように　孫を自慢するように話す。

「そんな事は訊いてねえんだよ！」

苛立ちを隠さない怒鳴り声を拓人の爺ちゃんは平然と受け止める。有り得ない程強い力で首を締め上げられる。

ぐぐつと首に力を入れるが焼け石に水、全く意味が無い。

「あぐあ……」

顔が青白く変色していき、酸素を吐き出す事さえ出来ない。

「言え。言わねえと殺すぞ！」

パクパクと口が動くのを見て、男は首を締め付ける手を緩める。

「ハアツ、かはつ、はあ、げほ……」

息を整え、血色を戻した顔に笑みを浮かべ言い放つ。

「誰が孫を売るかよ。考えて物を言え小僧」

諭え、殺されるとしても、人は売らない。

拓人は売らない。

ぐつ、と首に力を籠められた。

諭え、肩を揉んでくれたのが何か隠したい事があったとしても。

嬉しかった。

文句を言いつつも倉の掃除をしてくれた事も。

軽口を叩き合った事も。

戦争であんなに人を殺したのになあ。

ほろりと涙が流れた。

儂だけが幸せになっても良いのか。

そんな思いを抱えながら生きてきた。

人を殺したのにな。

今時人一人を殺しただけで罪になるのに  
儂には何一つ罰が無い。

そんな罰つされない地獄。

罪悪感の責め苦。

そんな物を誰にも負わしたくない。

「や、べろ……やべてぐ、れ」

「なら、言え！」

「おばえのため……」

男は真っ直ぐな瞳を見る。

確かに、何かの意志を感じた。



そう。

自分と同じく絶対に揺らがない鉄の意志が。  
力を抜いて、男は言う。

「そのたぐとって奴は絶対に見つけ出してやる」  
拓人の爺ちゃんは、立ち去って行く男に間違いを、正してやれない悔しさにむせび泣いた。

「シロガネは……俺と同じ……いや、ぶっ殺してやる！」  
小僧一人、救えなかった自分を攻め続けた。

「なあ、オイ。俺に魔法くれん

じゃねえのお？」

コタツで温まりながらのんびりした口調で言う。

「やっぱりあれは無し！」

手でバツテンを作っけ言う。

「何でだよ？ まあ、良いけどさあ」

興味なんか全然なかったように言っけみたが、実際は本当に残念だ。

残念過ぎて涙が零れそうになった。

安心したように頬を緩めたシロガネは、

「なんか……眠たくなって……すう」

「それはコタツの罨だ！ かかったら最後、風邪引いちまうぞ  
って俺も眠くなって来た……」

ごろん、とコタツの罨にかかってしまった二人。

今日は本当に色々な事があつたのだ。

仕方が無い事とも言える。

リーンリーンと煩く電話が鳴る。

しかし熟睡しているのか、電話が鳴っても二人は起きない。

だけど、それは幸せだったのかもしれない。

そう、今鳴つた電話を取っけいたら、眠る事さえ出来なかつたのだから。

「化け物！ 殺せ殺せ！」

誰が化け物何だろう？

何で私をみんなで？

シロガネの周りに人垣が出来る。

みんながシロガネに殺気を持ち、殺そうとする。

だけど、手は下そうとしない。

何かに怯えるように、決して歩み寄っては来ない。

何で殺そうとするの？

何で『する』だけの？

何で誰も歩み寄ってくれないの……。

「気味悪いんだよ！ この」

聞こえなかった。

自分の立っている地面が崩れ落ちた音で聞こえなかった。

みんなが殺そうとするのは、歩み寄って来ないのは……。

私が魔導書だからかな？

墜ちながらそう、思った。

シロガネはパチリとスイッチ

が入ったかのように夢から現実へと帰還した。

汗でじめつとするトレーナーをばさばさして風の中に送る。

「牛乳とごはんとミカンは無理ですって……いや、スーツも日本じ

や無理。え？ 非実在青少年には反対ですよ？ 実際ロリの女性と

か泣いてますよ？ 後藤さんですよ！ あの人は「私をモチーフに

した漫画が差し止めに……」とか言ってたし」

寝言でここまで長い台詞を喋る人って始めて見たなあ、とか思い

ながらまた微睡んでしまう。

「シロ、ガネ……」

何故ここでシロガネの名前が出てくるのかは分からないが、拓人

のそばに居ると悪夢なんか見ないような気がした。

魔導書でなく 個人として『シロガネ』として受け入れてくれ

る拓人のそばならば。

る。

魔女狩り

男も夢を見

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9389k/>

---

M a g i c b o o k s

2010年10月8日15時12分発行